

イギリス英語とアメリカ英語の発音の特徴とイントネーションについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 英語学, 音声学, ピッチとリズム, アクセント キーワード (En): 作成者: 平野, ムメヨ メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180221-310

イギリス英語とアメリカ英語の発音の特徴と

イントネーションについて

平野 ムメヨ

イギリス人とアメリカ人が話をしてしていると仮定して、彼等の英語がどの様に違つて響くであろうか。例えばイギリス映画とアメリカ映画を見に行つて、人物の話すのを聞いて見てもよい。彼等の英語の違いはどんな点にあるであろうか。我々は皆々 “broad” a n “flat” a の差を思ひ浮べるであらう。又は final [r] と preconsonantal [r] を発音するのとなりのとの差や、又はある種の語で両国で異つて発音されてゐるものを考へるであらう。しかしこれ等が両国の spoken English の重要な違いではないのである。私は両英語がきわ立つて異つてゐるのはその intonation にあると思ふ。

Thomas Pyles は “Words and Ways of American English” の中で、アメリカ英語とイギリス英語の抑揚が異なる為、お互の言葉がわかり難いのでびしりする事がある、と次の様に言つてゐる。

“For though the words may be the same, the music is strikingly different. And it is this fact primarily which makes British speech sometimes difficult for the American to understand, just as the distinctive intonation of American English sometimes baffles the Englishmen.”⁽¹⁾

(1) Thomas Pyles: Words and Ways of American English, page 235

H. L. Mencken の “The American Language” の中、Hilaire Belloc の文を引用して次の様に言つてゐる。

“What does an Englishman first notice on landing in America,” asks Hilaire Belloc, “as the contrast be-

tween the two sides of the Atlantic so far as the spoken language is concerned?" The answer is: "The first thing which strikes him is the violent contrast in intonation."

(2) Mencken, *The American Language*, p. 322

Richard D. Mallery の著書 "Our American Language" の中より引用する。"What is called the "American accent" or the "British accent" is not so much a matter of unusual handling of individual sounds but also a difference of intonation."

(3) Richard Mallery: *Our American Language*

それでは、この両国人の話す英語のイントネーションで感ずる事は何であるか。これは非常に複雑で分類が困難であるが、私はかりに次の四点を中心にして考へて見たらと思う。

一、発音の性質 二、テンポ 三、ピッチとリズム 四、イントネーションの型

この国の言葉でも、他の言葉と異なる種の性格を持つてゐる。British speech を聞くと感ずる事は、そのきびきびした鋭みである。言葉が歯切れよく聞える。Thomas Pyles はこの感心を次の様に言つてゐる。"British English is often referred to usually with approval, as "clipped," which is not much less vague than the American "drawl" and "twang," though it seems clear that "clipping" is sometimes conceived of as the antithesis of "drawling."

(4) Thomas Pyles: *Words and Ways of American English*, p. 236

Mencken の *British speech* が "abrupt, explosive, and manneristic" である。

(5) Mencken, p. 323

次の American speech は、いかにも、British speech と比較して和かくのんびりしてゐて、やや単調に聞える。

イギリス英語とアメリカ英語の発音の特徴とイントネーションについて

Pyles の言う “drawing” を感じである。そしてどうしてこういふ風に感ずるのであろう。分析して調べて見よう。

先づ British English を取り上げて見ると、そのきびきびした要素の一つは、ある種の子音の独特の発音から来ていると思はれる。即ち plosive (破裂音) の [p] 又は [t] である。この [p] [t] が stressed syllable の初めに来る場合 Received Pronunciation (Daniel Jones が “the widely understood pronunciation” として斯く呼んでくる southern England の発音) ではその [p] 又は [t] が相当強く aspirate される。即ち破裂の直後 [h] 音に似た氣息を強く出して発音される。例へば、tea (ti:) を発音する時 [t] と [i] との中間に [h] 音を響かせるのである。toy (tɔi) の場合は [t] と [ɔ] の中間の息がはいる。detain (di'tein) の場合は [t] と [e] の中間に [h] depart (di'part) は [p] と [a] の間に息を入れて発音するのである。London 地方ではこの [t] 音は強く、[s] 音が入ると、tea が tsei の様に聞えると言ふ。然し better, meeting, happy, keeper. の様なストレンスのなシラブルとか、stressed syllable の [s] の初まづけるものは、例えば spool, spear, steep, stand 等の場合はあまり aspiration は感ぜられない。この aspiration の為で、これ等の語が耳にきこく響くのは確かである。アメリカ英語にはこの強い aspiration は感ぜられないのである。

(6) Daniel Jones: The Pronunciation of English, p. 4

イギリス英語のするどい感じは又 glottal stop などにも見られる。これもアメリカの speech には見受けなすものである。これは [t] がストレンスのある母音のあとに來て、その [t] のあとに m, n, l, r, w 等が來る時、この [t] の代りに発音される音であつて、声門を閉鎖して突然開いて出来る音である。せきをした時の音である。この glottal stop は fortnight, quite right 等の [t] の代りに發せられる。又 Westminster Abbey を [w] linking [r] を防ぐ為に發音されることもある。又 Daniel Jones は Received Pronunciation では rolled [r] は殆ど聞かれなすと言つてゐるが、他の多くのイギリスの dialects ではよく聞く音である。

此の外 flapped [r] も British speech に聞かれる音であつて、巻舌で発音する rolled [r] に似てゐるが、前者はただ一回だけ舌の先を口蓋に打つけるのである。主として arrive, hearing などの様に、母音と母音との中間の [r] の発音に行はれるのである。[r] と言う音はむしろなめらかな等の音であるが、この様に roll されたり、flap される場合は、がさがさした音になる。

次にアメリカ英語を見ると、大体発音がなめらかである。British speech では [t] が aspirate される場合が多い事はすでに述べたのであるが、American speech では、この [t] の音がむしろ和らげられる方向に進んでゐる様である。それは、この [t] が voiced になる傾向であつて、[d] に近い音になるのである。それで外国人がこれを聞くと、mater, better, water, metal 等は madder, bedder, wader, medal の様に聞えるのである。これは [t] が弱く、その上ストレスのないシラブルであるから早く発音される為、この様に聞えるのであらうと思う。一体この位置にある [t] 音は甚だ変り易い音であつて、発音の仕方では [d] に、時には [r] に、又時には [n] に近い音に聞える事がある。主として unstressed syllables の中間の [t] (例えば See us at her home の at の [t]) や unstressed syllable の初めの [t] (例えば want to do の to) や twenty の a の [t] や butter の [t] 等である。然しこの音は最初の [t] (teacher, tomorrow) の如きは変化しないのである。又 start, coast, frequent 等の語が phrase の終りに来る場合なども、その [t] は変化しない。又 detain, contain, intend, extensive の [t] の様に中間又は終りの stressed syllable の初めの [t] をとも同様である。これは主としてアメリカの colloquial English の傾向であつて、イギリス英語の [t] 音と比較する時、アメリカ英語の方が遙かに和かく聞える理由がわかるのである。

この外 British English の clipped された感じを与へる原因の一つは、ordinary や necessary 等のシラブルを省略した読み方がある。イギリスではこれ等を 'ordnəri, 'nessə, seri とス々風に secondary accent をつけて四シラブルにして読んでゐる。このシラブルを省略し

て読むのは British speech の特徴の一つで、その為、早口に聞え、abrupt な感じを受けるのである。これに反して、アメリカの方は secondary accent までつけて、各シラブルを明瞭に発音する為、安定した感じを与へる。アメリカ人は extraordinary (ekstrə'ɔ:dnəri) の六つのシラブルを一々つねつねつに発音するが、イギリス人は iks'trɔ:dnəri と四シラブルにして読む。即ちイギリス人は各シラブルを一々読もうとはしないのである。この種類の語を少しあげて見ると次の様である。大部分 ary, ery, ury 等で終つてゐる。初めの読み方が British で二番目の読み方が American である。

dictionary	(ˈdɪkʃənəri)	laboratory	(ˈlæbrətəri)	(ˈlæbrəˌtɔ:ri)
monastery	(ˈmɑ:nastri)	obligatory	(ˈɒblɪgətəri)	(əˈblɪgəˌtɔ:ri)
preparatory	(prɪˈpærətəri)	cemetery	(ˈsemɪtri)	(ˈseməˌtɛəri)
secretary	(ˈsekɪtri)			

この様にシラブルを飛ばせて発音すると、一つしかなくストレスが非常に強くなつて、abrupt になる。これに反して、secondary accent をつけて発音する場合の stress は強く感じなく、一つ、secondary accent になる。これに反して、シラブルを一々つねつねつに発音するアメリカ英語の特徴は、その言葉をなつぎのつぎについでついでに読む。Mallery は secondary accent の特徴を次の様に言つてゐる。"The American habit of retaining both accents is unquestionably a great aid to distinctness in speech and conversely, the loss of the second accent in British speech has led to considerable obscuration of the syllables involved."

Mencken は American Language の Supplement II の中で、Joseph Combs と J. 人が、初期のラヂオのアナウンサーが Oxford pronunciation を真似たのを批評して、その発音がシラブルを無視してつねつねつな発音をしてゐる、と次の様に述べてゐる。"This Oxford pronunciation (the most offensive and illogical in the English-speaking world) is not practised by the majority of educated Englishmen."

It does not hesitate to assimilate, slur, chop, swallow, and cut: in shot, it stoops to anything in pronunciation that will make it as difficult as possible for average folks to imitate.”⁸⁹ 又 Mencken は同じベネチアの Columbia Broadcasting System が Frank Vizetelly の指導の元に、アナンサーの学校を作る事になつた時、Vizetelly の方針を述べて次の様に言つたと述べてゐる。“help in spreading the best traditions of American speech, which does not suppress its consonants nor squeeze the life out of its vowels.” Vizetelly はアメリカ英語のよゝ点を理解し、明瞭な発音を奨励したので、その後はイギリス英語を真似るアナンサーはなくなつたといふ事である。

(7) Mallery: Our American Language

(8) Mencken: American Language, Supplement II, p. 33

こゝでは非触れておかねばならぬのはアメリカ英語の spelling pronunciation である。Connecticut 洲にある Greenwich は spelling の通り *grinwilt* と発音してゐるが、イギリスの地名は *grindz* である。Delhi は英国人は *deli* と発音するが、ニューヨークの地名は *delhar* と発音されてゐる。又 Connecticut の Thames は *temz* と発音されるが、イギリスのは *temz* である。其の他同じ綴で読み方の異なるものは随分沢山ある。しかしイギリスと同じよみ方で呼んでゐるものもなほなほある。例えば Massachusetts 州と Maryland 州にある Worcester とよみ延は何れもイギリスの Worcestershire (*wusta, fir*) の如く *wusta* と呼んでゐる。ところが Ohio 州の Worcester の住民は、その spelling と pronunciation の不一致にたえられなかつたものと見え、地名の spelling を変えて *Wooster* にしてしまつた。伝統のなかつたアメリカ人がこの様な spelling pronunciation を行つたのは、当然な事であろう。未開の西部地方へ発展して行つたアメリカの歴史の上で、教育がはたした役割は大きい。アメリカ人程教育を尊重し *school-marm* に敬意を表はした国民もないのである。未開の地であるから、言葉に関する限り、頼りになるものは *school-marm* と Webster の dictionary と彼の *Speller* とであつた。それで spelling pronunciation に関つて Noah Webster の力は大きかつた。彼は明瞭に発音する事を主張し、母音子音を省略した発音に反対したのであつた。Northern

Britain の比較的正確な発音に賛成した。今日の American English pronunciation が [u] とか [r] の発音、其他の点に於て southern English pronunciation よりも northern English pronunciation に近くと言はれてゐる原因の一つもこの様なところにあるのであろう。一八二八年以来次々と発行された有名な彼の American Dictionary と Spelling Book 又は spelling pronunciation を奨励したのである。今日教育あるアメリカ人が誇として各シラブルをはっきり発音する傾向は、この百余年間にわたる Webster の数多くの speller の影響と言へるのである。この本は各小學校で教へられた。生徒は単語を例へば "b, e, g, i, n, begin" と云ふ風にくり返した。又 "c, o, m, com; p, o, po; s, i, si; t, i, o, n, tion, composition" と云つて、一々 spell してシラブルを覚えて行つた。又毎日の様々 spelling match が教室で行はれ、東西に分れて spelling の選手権を争つた。

English speech のテンポについては、直接、第一項の Speech の性質につながつてゐる。勝手にシラブルを飛ばして強スストレスで発音したりする傾向は、自然テンポを早くするのである。それでアメリカ人はイギリス人が非常に早口でその言葉は分り難いと言つた。前に挙げた Pyles も "The Britisher seems to be rattling away with a terrific rate." と言つてゐる。これに反してアメリカの英語の落ちついた発音、シラブルを丁寧に発音する傾向は、自然テンポをおそくする。と同時に言葉を分りよくする。アメリカ内の南部地方の speech を Southern drawl と呼んでゐる。これはその地方の人達がのろろ話すのを評した言葉であるが、イギリス人から見ると南部地方に限らず、アメリカ人全体の言葉が多少 drawl してゐる様に聞えるのである。Southern drawl はこの地方の人達ののんびりした生活がそうさせるのだと一般に信じられてゐる。彼等はストレスとされた母音を延ばして diphthongize して発音する癖がある。彼等は day を dy-ee, boy を boy-ee, my を my-ee とのばして発音する。It's a fine day today を It's a fai-in day-ee today-ee と云ふ。

ピッチとリズムに就ては、イントネーションの型のところまで詳しく説明出来ると思う。話すのを聞いても、イギリスの方がアメリカ人よりも声のピッチの範囲が廣く様に思はれる。Daniel Jones は、自國の British speech の音声の範囲の廣く事を次の様に言つてゐる。"The range of intonation is extensive. When people speak, their intonation often touches notes both higher and lower than they can sing. In declamatory style, as heard for instance on the stage, it is not unusual for a man with an ordinary voice to use a range of intonation of over two octaves."¹⁰⁾

(9) The Pronunciation of English, p. 145

Simeon Potter はイギリス人の立場からアメリカの speech を次の様に感ずると言つてゐる。"Further, it may be noted that both word-stress and sentence stress are weaker in American than in British English and intonation is more level. Consequently, American speech is more monotonous, but at the same time it is generally more distinct."¹¹⁾ 彼は American speech のストレスが弱く事を言つてゐるが、これは確かにアメリカ英語のやはらかな要素の一原因になつてゐると思つ。しかもこのあまり強くないストレスはイギリス英語よりも低いピッチで発音されるので、この性質を一段と強めてゐる様に思はれる。

(10) Our Language, p. 166

British English と American English の intonation の型が違つてゐる前にも、共通した点を先づ並べて見よう。

1) Sentence の中の stress を置くに強く発音するものは、主として content words (nouns, verbs, adjectives, adverbs, demonstratives, interrogatives) である。これに反して、強く発音しないものは、function words (articles, prepositions, personal pronouns, possessive adjectives, relative pronouns, conjunctions, auxiliaries) である。しかし内容によつては、function words、特に pronouns や auxiliaries を stress する事がある。又 content

words も stress しない事がある。

二' 1 つの sentence は 1 つ或はそれ以上の rhythm units から出来ている。そして各 unit は 1 つの pattern 又は contour を為し、intonation の 1 単位となる。

三' Intonation の種類は大體 (一) Rising-falling intonation (二) Rising intonation (三) Non-final intonation に分ける事が出来る。

次に intonation の型を形成する rules の様なものを示せば大體次の様である。British English に於ては、イントネーションの種類如何にかかはらず、rhythm unit の初めの方は同じ型である。終りの方が、その種類によつて異つて来るのである。最初の stressed syllable のピッチが一番高く、それから各 syllable が段々低くピッチに向つて降下して行く。最初の stressed syllable のピッチは普通の我々の話す声 (level 3 と仮定する) より高く、level 2 か、それ以上の高さである。最初の stressed syllable の前に unstressed syllables が 1-2 つある場合は、この等は最初の stressed syllable よりも低く調子で発音される。又完了した内容を持つ文、即ち rising-falling intonation で発音されるものは必ず最後の stressed syllable が level 4 まで降下する。この最後の stressed syllable は level 3 あたりから level 4 まで強く glide (母音の上を滑る) するのである。そしてこの最後の stressed syllable のあとに unstressed syllables が 1-2 来る場合は、Stressed syllable の終つたあとに level 4 の調子で軽く下るのである。

第二種 Rising intonation を持つ unit は、初めの方は第一種と同じであるが、最後のところが違つて来る。高いピッチから段々降下して来て、最後の stressed syllable のピッチは level 4 であるが、このシラブルのあとに unstressed syllable の続かなる場合は、この stressed syllable は level 4 の位置から強く尻上りの調子で発音される。しかし最後の強シラブルの後に unstressed syllable が一つく時は、例えば evening の如き場合は、eve は level 4 のピ

ツチで抑へて発音され、ning は軽く尻上りにこれに続き、level 3 位まで上げるのである。Non-final intonation は大体 Rising-intonation と同じである。要するに British English の場合は、最初の stressed syllable が一番ピッチが高く、二番目の stressed syllable がその次に高く、三番目の stressed syllable が三番目に高く、最後の stressed syllable が一番ピッチが低くのである。stressed syllables の中間にある unstressed syllables は直前の stressed syllables に軽く従つて居ればよい。だから大抵 stressed syllable と stressed syllable の中間の位置にピッチが置かれるわけである。然しある言葉を特に強調したい時は、前後に関係なく、しばしば語勢も強く、ピッチも高くなる事は、イギリス英語もアメリカ英語も同様である。

American English の intonation は British English のそれと色々の点で異なる。Rising-falling intonation に於ては、rhythm unit の初めは大抵 level 3 (普通の声の高さ) である。1 unit の中で最も重要な語一乃至二にストレスが置かれる。ストレスされたシラブルは少しもレベル高く、即ち level 2 で発音される。ストレスが一つの場合は、これは unit の終りの方に表はれるのが例である。例えば three と言ひシラブルならば、その発音は level 2 のピッチから level 3 を経て level 4 まで、下へ glide するのである。若し stressed syllable のあとに unstressed syllable が来る場合 (例へば yesterday の如き) は、Yes を level 2 で発音し、terday は軽く level 4 で発音する。強調が必要な場合は、ピッチは level 1 まで引き上げられる事もある。

Rising intonation の場合は、初めの unstressed syllables は Rising-falling intonation と同様、level 3 であるが、最も重要な語の stressed syllable 以下が level 2 に移動するのである。これがこの種類の最も簡単な型である。しかしもしと曲折を望むならば、又ある語を特に強調させたいならば、幾分ピッチを変へる事が出来る。例えば Do you know him? を発音する場合、普通ならば Do you を level 3 に、know him を level 2 に置くのであるが、特に know を強調した時は、そのピッチを Do you より一段下げて level 4 におき、突然ピッチを shift させて him

を level 2 にもつて行く。こうすると know と him との音の差が大きくなり、従つて know が強調されるのである。

(例証参照)。強調されるシラブルを上げるか下げるかして周囲の他のシラブルから引き離すのである。

Non-final intonation は unit の終りが level 4 に下りなすのが特徴である。又 level 4 に下つても、語尾が一寸はね上つて level 3 のピッチになるのがある。普通はこの unit の終りのシラブルは level 2 で発音される。

次に British English と American English のイントネーションの異なる主な点を挙げると、次の如くである。

(一) British English の intonation は 1 の rhythm unit の初めの方がピッチが高く、終りに近づくと従つてピッチが下つて来る。特徴は初めの方にある様である。American English の型はこれとは違つてゐる。大体三つか四の pitch levels を上下するが、大底一 unit の終りでこれが行はれ、初めの方は変化に乏し。故に American English の intonation の特徴は unit の終りにあると言へよう。

(二) British English ではピッチと stress とが必ずしも一致してゐな。American English は大体一致してゐる。即ちピッチの高きところには stress があると見てよ。そして stress のなところはピッチが低。しかし疑問文は別である。疑問文の場合は強調する時にわざとピッチをさげる事がある。

(三) British English は rising intonation を American English より多く用ひる様に思はれる。アメリカ英語では falling intonation で発音される様な unit がしばしばイギリス英語では尻上りの rising intonation になる事がある。私はこの点も例証したく思つてゐたが、紙数も限られてゐて、長い sentence の分解が全然出来なかつた。

(四) British English は又一乃至二シラブルの範囲内で強調が行はれる場合に、rising-falling-rising の intonation をよく用ひる。そしてこれは characteristic な感じを与へる場合が多い。例えば、ある言葉を対照させたり、特に強調する場合、このイントネーションで発音する。例えば、He takes French lessons, but you take English lessons. のうち、you を他と対照させる場合に、三種のピッチをこの一つのシラブルに使ふのである。この場合、you のみで一つ

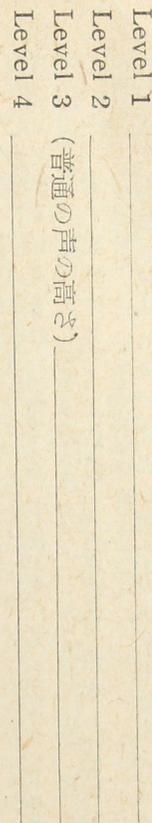
の unit を構成し、ピッチが level 2 あたりから level 4 に下り、それから level 3 まで上り、rising-falling-rising の intonation を作る。同じ様なイントネーションは名詞にも動詞にも、又は No, Yes, Well, Oh, 等にも用ひられる。

(五) 又 British intonation は最初のシラブルに重点を置いて居る為、終りに重要な語が来る時、それが低く level で発音されるから聞え難い事がある。其の上 British English ではシラブルを省略して発音する癖があつて、ますます難解にさせる。これに反し American intonation は終りが殊にはじきりしてゐるのが特徴である。

(六) 全体を見渡すと、British intonation は American intonation に比較して、ピッチの変化が多し。American intonation は声が level 2 と level 3 を上下し、時々 level 4 に下る rhythm を持つ。British intonation に比較して、変化が少く、monotonous な感じを与へるのである。特に長センテンスの多い文では、変化の起る最後の level 2-4 のイントネーションが比較的少く、尚更である。ロスアンゼルスから放送されるアメリカの軍のラジオ放送を短波で聞いてみると、イギリス人がアメリカ英語は monotonous だと言うわけが解るようだ。個人の会話の英語はセンテンスが短く比較的变化があるから、放送英語ほど単調ではない。しかし American English のイントネーションは規則正しく、整然としてゐる感じである。この整然としたリズムを助けてゐるのは、American speech が一つのシラブルをも忽せにしないで発音すると言う性格である。この事はすでに述べた通りである。

さて両英語の比較に移る前に、Spoken English の pitch levels をかりに四つに単純化し、発音されるシラブルを適當なレベルの上に置く事にする。これは Michigan 大学 (Pike 教授 Fries 教授などが研究してゐる) ¹²⁾ などで近ごろ使用してゐる方法である。イギリスではこの様な方法を用ひてゐない。(彼等は大きづばにシラブルの高低を点で表はす方法を用ひ、音の細かい變化は知る事が出来ない。この点アメリカ英語の研究は一歩進んでゐる。) 私はイギリス英語も同様にこの四つの levels にあてはめて見たいと思ふのである。しかし後者の場合は少くとも六七の levels が必要かと思ふので、level と level との間にもう一つ level を入れて考へる必要が出て来ると思ふ。各人によつて幾分か違ひはあ

るけれども、大体我々の話す声の普通の高さを level 3 と仮定すると、level 2 はこの普通の声より少し高い声、level 4 は普通より少し低い声となる。そして level 1 は level 2 よりも高い声である。これは興奮した時とか、ある事を特に強調する場合に表はれるものである。この四つのピッチの高さを次の様に四つの線によつて表はす事とする。



② Kenneth L. Pike. The Intonation of American English, Univ of Michigan Press. C. G. Fries: Teaching and Learning English as a Foreign Language

Pike 教授等は、普通に印刷された文の各語のシラブルの上下に線を引いて、声の四つのピッチを簡単に表はす方法を用ひてゐる。これは各シラブルのピッチや glide を正確に表はすので、今のところ一番よい方法であると私は思つてゐる。然し日本では印刷も困難であるので、私はこの四つの線の上にシラブルを乗せる方法を考へて見た。場所を多く取り、その上 glide を表はすのが難しく、不自然な形になつてしまつたけれども、これはやむを得ない事と思う。私は glide を表はすのに、letter を一つづつ離して斜めに並べたり、母音を重ねたりした。又ストレスのあるシラブルにはアクセント (') のしるしをつけた。

Intonation の型

1. Rising-falling Intonation.

(一) 敘 述 文

British English

American English

1	'went	to	'see	him	'y- e-	sterday
2-	1					
3-						
4						
1						
2-	'School	is	over	at	'th- r-	terday
3-						
4						

1						
2-	'School	is	over	at	'th- r-	terday
3-						
4						

(最後のシラブルに stress のある場合は、その一つのシラブルが level 2, 3, 4 にのぼられるので、母音をのびして発音されねばならぬ)。British English では American 発音より短くはなすが同様の発音である。これを glide ヲン(°)

(二) 命令文

British English

American English

1	'Come	to	the	ho-	't- e-	1.
2-						
3-						
4						

1	'Look	at	the	'bl- a-	-c- k	board
2-						
3-						
4						

イギリス英語とアメリカ英語の発音の特徴とイントネーションについて

イギリス英語とアメリカ英語の発音の特徴とイントネーションについて

(三) 疑問詞で始まる疑問文

1	'What's	the	'm-	a-	ter ?	What's	the	'mat-	ter ?
2	'What	are	you	'd-	(o-)	'What	are	you	'do-
3					oing ?				ing ?
4									

1) Rising Intonation

(一) 疑問詞で始まる疑問文 (Yes, No の答を必要とするもの)

British English

American English

1	'Are	you	com-	ing' ?	Are	you	'coming?
2							
3							
4							
1	'Do	you		know	Do	you	him ?
2							
3							
4							

(一) 疑問文の形になつて居らない疑問文

1				
2	'live			
3	You	in	the	'ci-ty ?
4				

(三) 依頼歎願等を表はす文

1	'Won't			
2	you			
3				
4				

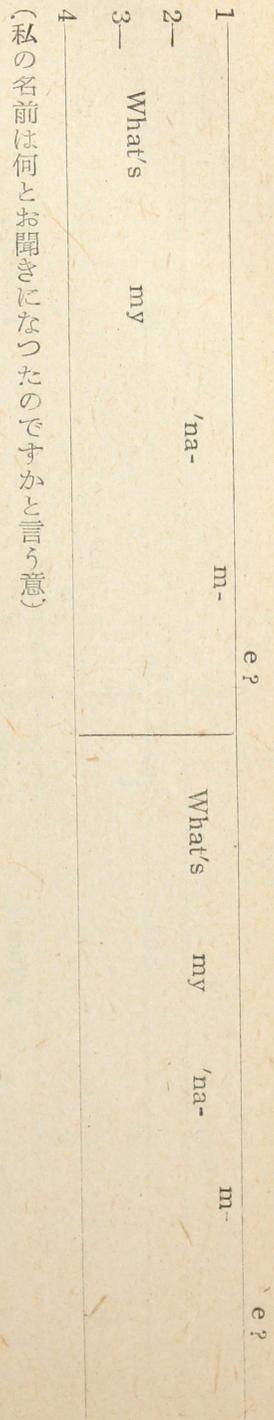
(このイントネーションの特徴はピッチが総体的に高いことである。)

(四) 言外にある意味を持つ文

1				
2	'thought			
3	I			
4				

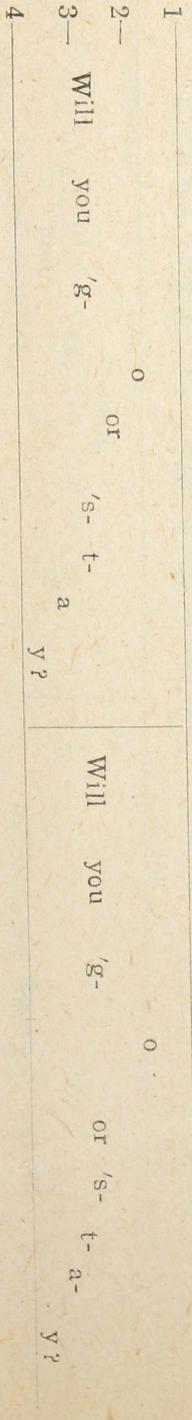
1	If			
2	you			
3				
4				

(五) 相手の質問を繰返して聞く文



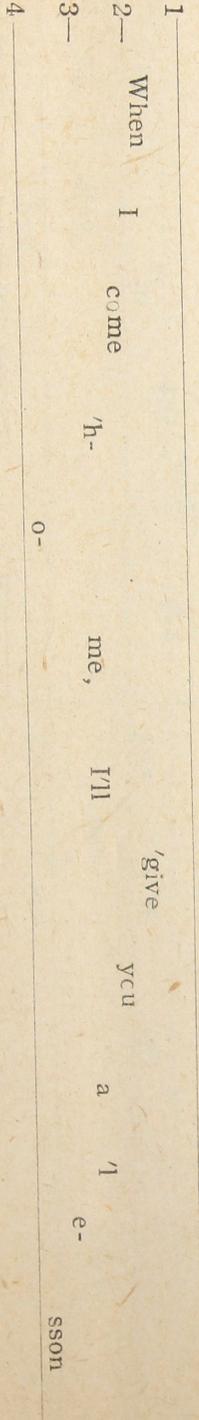
III Non-final Intonation

(一) 二つの何れかを聞く文



(二) 未完結の clause, phrase, words 又は羅列された words, phrases 等

British English



今ここに大体両英語のイントネーションの重要な型を図解し、比較して見たのである。しかしこのイントネーションの型ばかり知つても *Speech* の全貌がわかつたとは言へないのである。個々の語を離れてイントネーションは存在しないのであるから、我々はイギリス人の共通したある種の発音の仕方とか、アメリカ人のシラブルに対する態度とか、全体のテンポとか言う様なものを了解して居らねばならない。即ち両英語の発音の性質とも言へるようなものである。

日本ほど外国語として英語を研究している国もまれである。また日本人ほど英語を学びたいと思う国民もあまりないと思はれる。ところがまた日本人ほど英語の発音とかイントネーションに無関心なものも少い様に思はれる。専ら *trans-lation method* によつて教へられる為であろうけれども、大変不思議な事だと私はいつも思うのである。イギリスの英語とアメリカの英語と二つの英語に接していながら、どちらもはつきり解つていないのである。だからある専門家がいつかの「英語青年」に「ボストンの英語がイギリスの R. P. (Received Pronunciation) に酷似してゐることが注意される。それゆゑ日本の英語教育にはイギリスの R. P. を採用してよ」と言ひ得ると思う。」と言うような大胆な事が言へるのだと思う。

社会の総べてが変化して行くと同様に、*spoken English* も日々変化しつつある。Standard のあり得ない理由もそこにある。S じも “the most widely understood English” を手本としなければならぬ。ところが、ラジオやテレビジョンや飛行機の発達によつて *spoken English* にも大變な変化が来つつある様である。最近の出版物をよむと、ニューヨークの子供が使用してゐる *Americanisms* をロンドンの子供がそのまま使つてゐると言う。又名詞の第一シラブルにアクセントをつけてよむアメリカの傾向は段々イギリスにも侵入して来てゐるといふ。又ラジオや映画を通してアメリカのイントネーションが、も早やイギリスであまり珍らしくなくなつて来たと言う。イギリスの英語も同様にアメリカに取り入れられて、段々両方の特徴も目立たなくなるのではないかと思はれる。しかし又反対の方向へ進んで行かないとも限らないのである。とにかく *Speech* は生きてゐるものであるからこの研究は実に面白い。

終りに臨んでお断りしておかねならない事は、イギリス英語とアメリカ英語のイントネーションは両国に於てそれぞれ研究されているけれども、この二つのイントネーションの比較図解は、私の知つてゐる限りでは、未だなされていない様であつて、私の試みは、だから非常な冒険であつたのかも知れないと思つてゐる。あいまいなところや、間違つたところが相当ある事と思う。人の声を図解するのは随分難しい事であつて、その上、同じイギリス人でもアメリカ人でも人によつてその話し方が幾分違つてゐるのであるから、実際には図解などは出来ないかも知れない。しかし声の様なとりとめないものは、図にして眼で見ない限り、その性質なり、特徴なりをつかむ事は難しいのである。私はこの研究をつづけて行き、あいまいだつた諸点を正したいと思つてゐる。